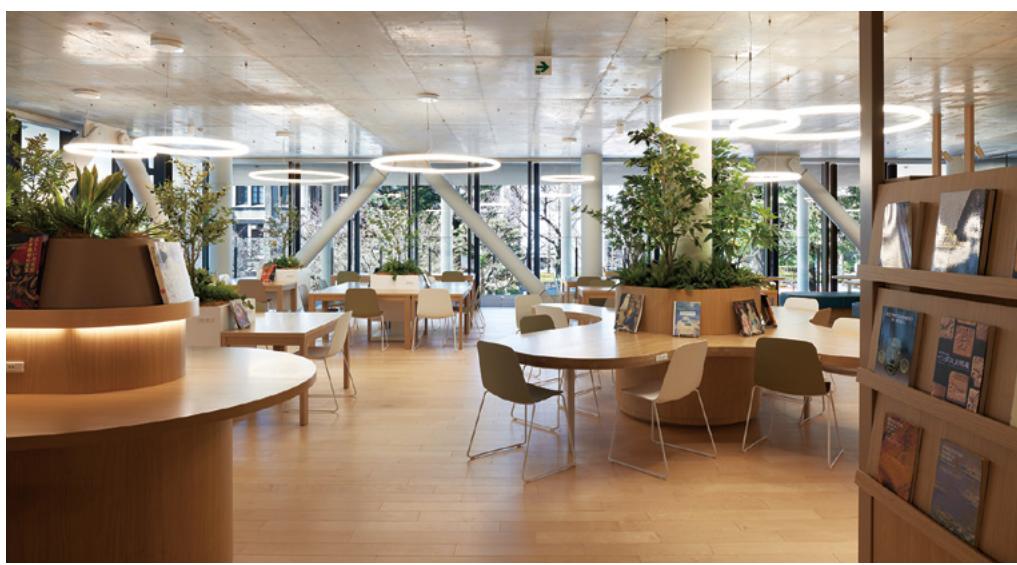




青山キャンパスの中心部に位置し、キャンパスのハブとなる



学生で活気づくラーニングコモンズ



2階図書館セキュリティーゲート



資料探しの相談窓口となるレファレンスカウンター

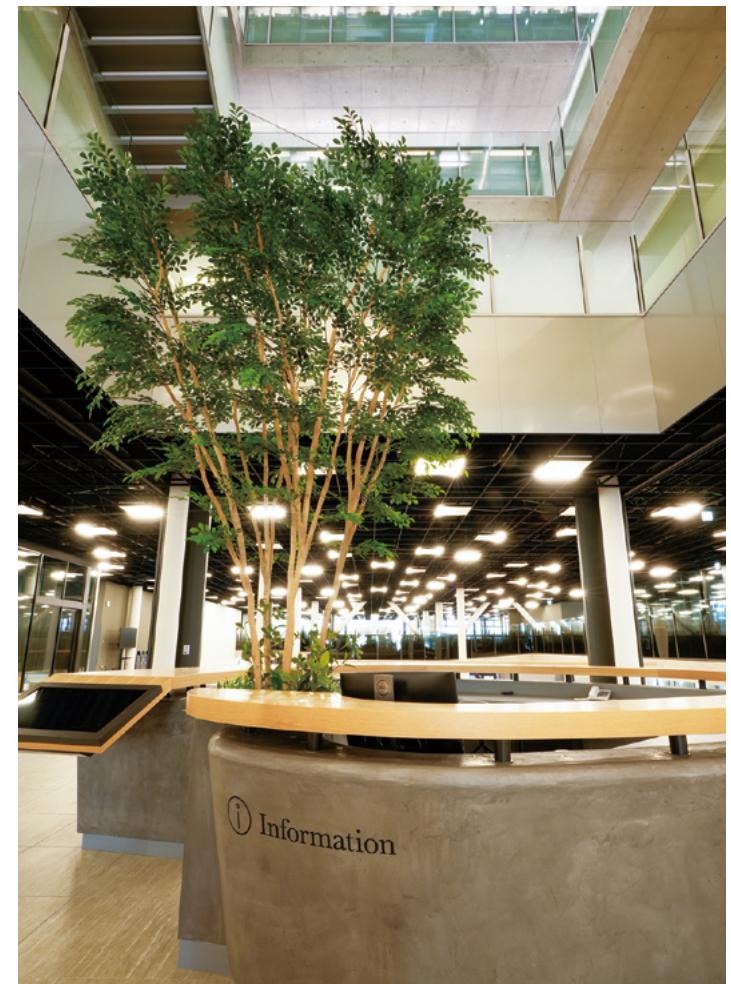


表紙が見やすくスタイリッシュな雑誌コーナー

青山学院大学 マクレイ記念館



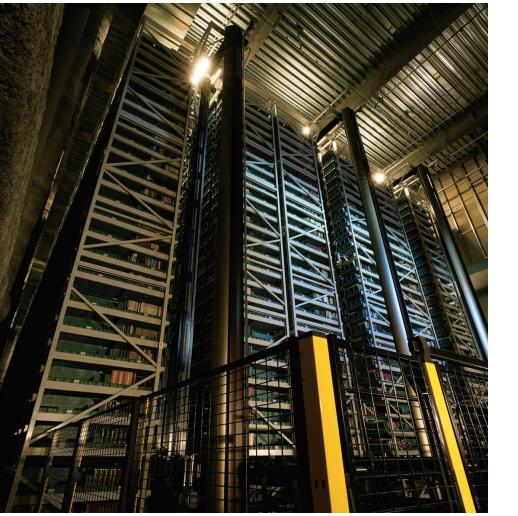
新世紀のキャンパス



1階総合受付(情報学習フロア)



建物中央部は吹き抜け構造



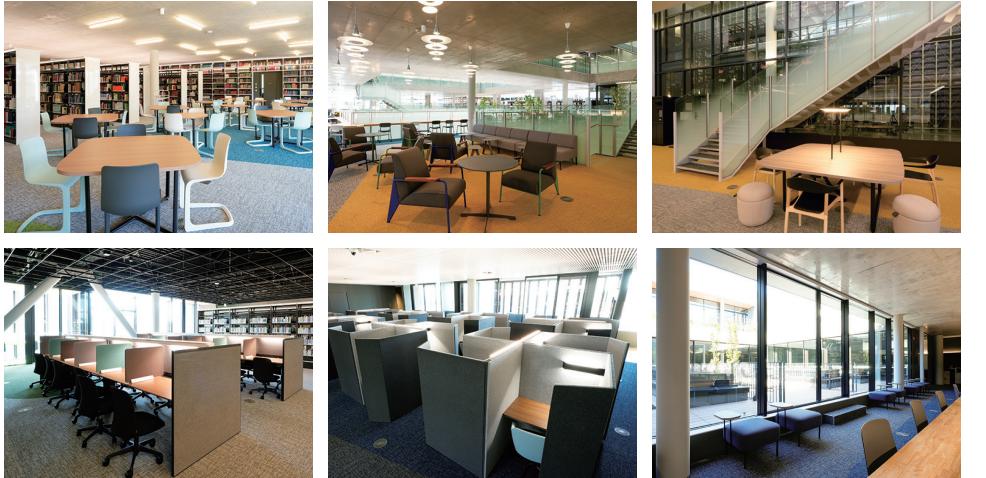
4階から6階にかけて設置された自動書庫。
学生は「セルフブース」から直接資料を取り出せる



5階研究個室



2階から5階までの建物外周部に設けられた学習スペース「Aisle」。多種多様な顔を持つ



各階ごとに特徴の異なる閲覧スペース



様々な言語に翻訳された聖書を配架する
「シャローム・ライブラリー」



集中とリフレッシュのメリハリを生むテラスルーム



PC教室（1階情報学習フロア）



地下1階から1階は情報学習フロアとして機能

2024年4月、青山学院大学の青山キャンパスに、青山学院創立150周年記念事業の一環として「マクレイ記念館（図書館・情報メディアセンター）」が開館した。単なる書籍の収蔵・貸し出し施設という従来の図書館の枠組みを超えて、学生の多様な学習スタイルに応え、新たな知の創造と交流を促進する学びのハブとしての役割を担っている。前身の図書館が竣工したのは1970年代。半世紀を経て、青山キャンパスの学生数の増加、施設の老朽化、蔵書スペースの狭隘化等が進んだこともあるが、何よりも現代の大学教育に求められる学習環境との乖離が大きな課題となっていた。静かに個人で学習する場だけでなく、グループでのディス

カッションやプレゼンテーションの準備、オンラインでの共同作業等、学生の学びの姿は大きく変化した。こうしたニーズに応える新図書館の構想は、実に20年近く前から温められてきたものである。

地上6階、地下1階建ての建物は、ガラスを多用した開放的なデザインが特徴だ。館内に足を踏み入れると、地下から地上まで続く吹き抜けが広がり、自然光が降り注ぐ。「一人でありながら、一人ではない」という感覚が、互いの学習意欲を静かに刺激し合う。学生は思い思いの「居場所」を見つけ、学習に取り組んでいる。

多様な学びを促すフロア構成

各フロアは、学習の目的に応じてコン

セプトが明確に分けられている。地下1階・1階は、充実したICT環境を備えた「情報学習フロア」として位置づけられている。PCや各種ソフトウェアが利用でき、情報リテラシー教育やデジタルコンテンツ制作の拠点となる。2階から4階は、文字通り「知を抜げる」ための空間だ。個人で静かに読書や思索にふけるエリアから、複数人で集まり気軽に相談や議論ができるスペースまで、目的や気分に合わせて選べる多様な形態の座席が用意されている。学生はここで主体的に学び、コミュニケーションを通じて新たな発見や創造へとつなげていく。さらに5階・6階は、より専門性の高い学びのためのフロアとして、学生や教員が個人での学

習・研究に利用できる研究個室や、研究発表や講演に最適なプレゼンテーションルーム等が設置されている。そして、この図書館の大きな特徴の一つが、4階から6階にかけて設置された約80万冊収蔵可能な自動書庫である。これにより膨大な学術資料を効率的に管理しつつ、貴重なスペースを学生のための多様な学習空間として最大限に活用することを可能にした。

利用者と共に進化する「生きた図書館」

マクレイ記念館の誕生は、学生のキャンパスライフに目に見える変化をもたらしている。開館後の利用者数は以前の図書館の利用状況と比較して2.6倍にまで

増加。多くの学生にとって不可欠な場所となっていることがうかがえる。図書館を利用するためにはキャンパスに足を運ぶ学生もいるという。

また、ICタグによる図書の管理等、図書館DXの推進により、職員の役割にも変革をもたらした。従来の図書の提供といった業務に加え、学生の学習相談に応じたり、施設の効果的な活用法を提案したりする等、より能動的で専門的な対人サポートのウェイトが高まっている。職員は、学生にとって最も身近な知の案内人として、一人ひとりの学修を支えている。特に、生成系AIの利用が急速に進む現代において、学生が安易にAIに頼るのではなく、自ら情報を探し、その真偽を吟

味し、深く思考する力をいかに育むかという課題に対し、リファレンスカウンターでの「人」による対話やサポートの重要性は増している。

この図書館の大きな特徴は、完成された空間ではなく、学生のニーズ、教育のニーズを汲み取りながら柔軟に変化し続けることを重視している点にある。「学生本位」の考えに基づき、什器の配置やエリアの用途等も、利用状況に応じて見直している。マクレイ記念館は、現状が完成形ではなく、時代と共に呼吸し、学生と共に進化していく「生きた図書館」として、青山学院大学の新たな教育の姿を体現している。

（文／金剛寺 千鶴子）